

世代間格差の試算の一例

〔参考資料1〕 世代間格差の試算の一例

- 2012年1月内閣府経済社会総合研究所からESRI Discussion Paper NO.281として「社会保障を通じた世代別の受益と負担」が公表された(研究者の個人論文)。

○ 研究の目的と特色

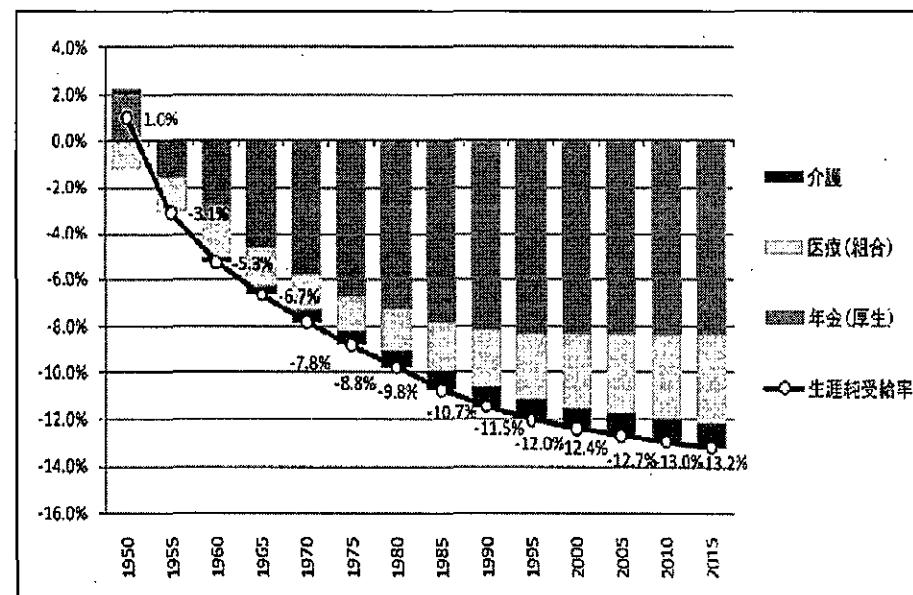
社会保障(年金、医療、介護)モデルを構築し、現行の社会保障制度が抱える世代間不均衡を定量的に分析。従来の研究に比べ、

- (1) 年金モデルは『平成21年財政検証』を忠実に再現(ただし、企業負担を自己負担に含めて試算)
- (2) 医療モデル、介護モデルについても政府の試算に準拠して推計

○ 主要な分析結果

- ・ 社会保障の生涯純受給率(=(受給-負担)/収入)を生年別に見ると、1950年生まれは1.0%の受益超過だが、若い世代ほど負担超過幅が大きくなり、2010年生まれでは▲13.0%の負担超過
- ・ 現役期に保険料を負担し引退後にサービスを受取る構造は、年金、医療、介護の3制度に共通しており、社会保障を通じた世代間不均衡は無視できない大きさ

【年金・医療・介護全体における生涯純受給率】



注1: 生涯純受給率

$$= (\text{生涯総受給} - (\text{生涯保険料} + \text{生涯自己負担})) / \text{生涯収入}$$

注2: 男女計。年金は厚生年金、医療・介護は組合健保の加入者をベースとして算出

※ 上記の試算については、平成24年3月23日「第4回社会保障の教育推進に関する検討会」資料2-1において、いくつかの問題点等が指摘されている。